

books for a private study

私的研究本

会場：

せんだいメディアテーク

テーマ： 挫折

研究者： 鷺田 清一(せんだいメディアテーク館長)

Book!
Book!
Sendai
2015

Book 1 『コーネルの箱』 チャールズ・シミック著 (文藝春秋) 2003年

Book 2 『植田正治 小さい伝記』 (阪急コミュニケーションズ) 2008年

Book 3 『ことばの顔』 鷺田清一著 (中央公論新社) 2000年

若い頃に手を出し、かなりのめり込んだはずですが、結局のところ、先達、後続の「才能」を見せつけられて、その道を断念したわたしの「挫折」の、そのごくごく私的な研究です。挫折してから、もはや「作家」の眼が消え、「批評」する側に回ることになりました。西欧でいう美学、エスティックが「絵、捨ててく」と聞こえてなりません。

挫折したのはその絵、そして写真とピアノです。

まず絵。愕然としたのはエゴン・シーレの線です。筆をもつのはもうあきらめようと遊び半分で小さなオブジェのコラージュを始めましたが、そこにもジョゼフ・コーネルという、レベルの違う先達がありました。二度の挫折例のうち、シーレの画集はとても高価なので、『コーネルの箱』を。

次に写真です。これはまいった、という気分でのこのところ眺めているのはTASCHENから出ているヴォルフガング・ティルマンズの三巻本の作品集ですが、これも入手しにくいので、二十年ほど前にのめり込み、そのあと6冊の自著の表紙に使わせてもらったいわゆる「植田調」の写真、それを編んだ『植田正治 小さい伝記』を。ぼくが選んだベスト75は、植田正治・写真／鷺田清一・文『まなざしの記憶』(阪急コミュニケーションズ、2000)に載っています。

最後はピアノ。この挫折記を「モーツァルトにはじまりショパンに終わる」という題で書きました。ぼくが書いた唯一の挫折記で『ことばの顔』に収録されています。この文章が、NHKの朗読コンクールの課題文に選ばれ、ぼくの無残な挫折がくりかえし全国にたれ流されることになりました。

とうに諦めがついているかとおもえば、さにあらず。(自著以外の)これらの本を見つめながら、あいもかわらず「こりゃ、とてもかなわんな」とため息をついてばかりいます。でもそれは、一日のうちでぼくのもっとも幸福な瞬間でもあります。

鷺田清一：

1949年、京都生まれ。せんだいメディアテーク館長、京都市立芸術大学理事長・学長。前・大阪大学総長。おもな著書に、『モードの迷宮』(サントリー学芸賞)、『「聴く」ことの力』(桑原武夫学芸賞)、『「ぐずぐず」の理由』(読売文学賞)、『メルロ＝ポンティ』、『哲学の使い方』、『しんがりの思想』など。愛犬は、柴の左近(さーちゃん)、右近(うーちゃん)。好物は、おうどん。